

## 滋賀県近世社寺建築の調査

### 建造物研究室

從来からおこなわれている近世社寺緊急調査の一環として、今年度は滋賀県を担当した。滋賀県には国指定の建造物が国宝を含め220棟もあり、京都府・奈良県に次いで多いことでもわかるように、社寺数はもちろんのことその遺存度も高いことから、2ヶ年にわたって調査することになった。今年度の調査範囲は、県南部を中心にして一部琵琶湖沿いに長浜市などの6市15町にわたる。調査した数は、調書作製・写真撮影・平面実測をともなう第2次調査が114件151棟、これに調書・写真のみの第1次調査46棟が加わる。以下おもに第2次調査をした建物についてその概要を述べる。

まず、神社本殿では圧倒的に流造が多く調査例の8割以上を占める。そのうち三間社はかなり特徴的で、ほとんどの場合、正面に1間ないし3間の向拝がつく。現在、重要文化財に指定されている建物をみても、材料が後補材に替っているものがあるものの、その8割が向拝をともなっており、中世からの伝統が近世になっても終始引きつがれていることがわかる。したがって、松尾神社（甲南町・宝暦3年）や菅原神社（彦根市・宝暦3年）のような向拝のないものはむしろ異例である。同様に石山寺三十八所権現社（大津市・慶長7年）も工事にかかわった工匠系列の違いがあらわれたものと考えられる。同じ流造でも一間社の方にはさほどの特徴はない。それは建物自体の構成が単純で変化する余地が少ないことに起因するものとみてよい。

流造以外では切妻造・入母屋造・春日造などがあるが、その数はいたって少ない。切妻造では流造同様いざれも向拝をつけていて、両者の関係が近接していることがうかがえ興味深い。

調査した建物は年代別では18世紀のものが最も多く、以下17・19世紀と続くが、19世紀のものは調査をかなり割愛したため、実数は新しいものほど多いはずである。17世紀のものは21棟を数え、遺存度は高い。またそれ以前に遡るものとして、三間社では伊岐支呂神社（草津市・慶長5年）が、一間社では雨神社（蒲生町・大永3年）他3棟が確認された。いざれも後世の補修が多少あるが貴重な遺跡といえよう。

境内建物としてほとんどの場合別棟の拝殿をもつ。御上神社にみると、おおむね入母屋造妻入りの形式をもち中世の伝承としてとらえることができる。調査した中では、大宝神社・宇和宮神社（ともに栗東町）が古く、16世紀の建立と考えられる。

一方、寺院建築では大型真宗本堂の存在が目立つ。真宗寺院は県下の寺院宗派別でも全体の51%を占めており、遺構の数も断然多い。重要文化財指定の大津別院・長浜別院に次ぐものとして福田寺（近江町・正徳元年）・円照寺（彦根市・宝暦元年）・弘誓寺（能登川町・宝暦3年）・福正寺（守山市・宝暦4年）・弘誓寺（五箇荘町・寛政8年）・大恩寺（守山市・文永6年）などが桁行20mを超え注目される。なかでも福田寺は、外陣まわりはすべて角柱として密に配り古式をとどめている反面、内陣は円柱をもちいて当初から後門形式にするなど新しい傾向をも含み、立

登らせ柱の存在とともに大型真宗本堂の一形態を示している。

建立年代では蓮生寺（守山市・元和元年）が古い。屋根勾配緩く以後の真宗本堂とは異なる外観をもち、かつ内部では一部丸柱とするほかは角柱を忠実に一間毎に配り、また仏壇も内陣後方に三ツ並びのものに復原できることなどあきらかに古式を保ち、中世から近世への変遷過程を知る上で貴重な建物といえる。一部後世の改造はあるが棟札によって建立年代が明確であることも意義が高い。

真宗については浄土宗本堂があげられる。18世紀に入ると、外陣を内陣両脇にも広げかつ大きな虹梁形飛貫を各柱間に渡す、内陣の正側面三方に低い結界をまわす、内陣後方に四天柱を立て来迎壁を設けることなど類型化が進み画一的となるきらいがある。しかしそれ以前のものでは、例えば正福寺（近江八幡市・承応3年）にみるごとく、内陣を中央後方におき、その左右の脇の間と横三室に間仕切った外陣とで構成する、いわば住宅風の雰囲気をとどめる平面であったことがわかる。

境内建物を群としてとらえた場合、瓦屋寺（八日市市・臨済宗）や長寿院（彦根市・真言宗）が圧観である。前者は、箕作山の中腹に占地し、本堂（正保2年）を中心に経蔵・開山堂・地蔵堂などが高く低く建ち並び、香山和尚中興の趣きを今に残すものであり、後者は、彦根城天守閣を西方にみはるかす景勝地に元禄時代の堂宇が集中し、まさに代々藩主の崇敬篤かった寺院としての風格をもつ。

今まで知られているように、近世の近江一円は五畿内同様、こと普請に関する一切については京都にあった「中井役所」の管轄下におかれていた。現に社寺対中井の往復文書を蔵する社寺も多い。あわせて、棟札や銘文など建物の建立を証する資料が豊富なことも近世社寺建築の特色の一つである。これらの資料はただ単に建物の建立年次をきめるだけでなく、例えば地域に分かれて存在していた大工組などの造営組織を知るためにも、また建設に要した費用などから当時の社会経済を知るためにもはなはだ貴重なものであることはいうまでもない。今回の調査でも相当数収集できたことは幸いであった。これらをいかに分類整理するかが今後の課題の一つである。

（細見啓三）